

# クラーク室内管弦楽団 第29回演奏会

“第10回 旅立つ人に捧げる演奏会”

2013年3月13日(水) 19:15 開演

北海道大学クラーク会館講堂

入場無料

プログラム

J. S. バッハ (1685-1750)

管弦楽組曲第3番ニ長調 BWV. 1068

W. R. ワグナー (1813-1883)

「ジークフリート牧歌」 WWV. 113

(生誕200年, 没後130年記念)

G. ビゼー (1838-1875)

交響曲ハ長調

指揮：奥 聡 (メディア・コミュニケーション研究院)

お問い合わせ：011-706-6595 (工学研究院 下川部雅英)

## プログラム・ノート（第 29 回演奏会）

テレマンがライブツィヒの大学生を中心として組織した音楽団体を、1726 年または 27 年にバッハは引き継いで指揮をしていました。この**管弦楽組曲第 3 番**はその団体のために作られたと考えられています。バッハに限らず、この時代の職業作曲家は、貴族や教会に雇われたりして、もっぱらその職責上期待されている実用を第一義とした作曲を行っていました。教会のミサ曲ばかり、貴族の食事や宴会用の音楽ばかりです。そしてこのような多くの作曲家の多くの曲は、その場限りの使い捨てであり音楽の質もそのようなものであったと思われる。しかし、そのような今日状況で作曲された曲であっても、バッハやモーツァルトの曲のように、後世まで残される質を持った曲が作られることもありました。これはいわば「過剰品質」の作品といえるでしょう。いずれにしても演奏者も決まっており確実に演奏されることが約束されている上で作曲された音楽であるということになります。本日は、チェンバロの他に、3 本のバロックトランペットを利用しての演奏になります。

本日 2 曲目のワーグナーによる「**ジークフリートの牧歌**」は、誕生日の朝に妻に捧げる「サプライズ音楽」として作曲されました。つまり明確な演奏の目的があって作曲されたものであると同時に、上記のバッハとは異なりその動機はきわめて個人的なものであった、という特徴を持っています。この曲の作曲と前後して作られた楽劇から多くの主題を援用した構成になっていますが、ここでの「ジークフリート」はワーグナーの幼い息子の名前です。バッハの曲同様、具体的な利用目的のために作曲されたものですが、それが時空を超えて今日まで演奏され続けているということは、それ相応の質を兼ね備えているということになるのでしょうか。バッハは自分の曲が、21 世紀に東洋の島国で演奏されることなど想像だにしていなかったと思われるが、ワーグナーはどう思っていたのでしょうか。自分の音楽の普遍的な魅力を自覚し、それにより広く長く演奏され続けられることを想像していたかもしれません。

本日最後の曲、ビゼーの**交響曲第 1 番**は、上記 2 曲とはその作曲の目的という点で大きく異なるといえるでしょう。パリの高等音楽院の学生であった 17 歳のビゼーのこの曲は、作曲当時に実際に演奏された記録はなく、そもそも何か具体的な利用目的があって作曲されたわけではありません。おそらくプロの作曲家を目指す若いビゼーの内的動機のみで作曲されたのではないかと考えられます。そして、この曲は長い間忘れ去られていました。20 世紀に入ってしばらくしてからグラスゴーの音楽研究家に再発見され、その勧めでバーゼルで初演されたのです。作曲から 80 年もたった 1935 年のことでした。曲の品質は 17 歳とは思えないほど高く、今日の演奏や鑑賞に堪えるものになっています。これは依頼され目的を持って作曲されながら使い捨てられた多くの曲の対極をなすものといえるかもしれません。

（奥 聡）